

2023 年度の研究室の動向

2023 年 4 月に松尾(H9)が九大医療経営・管理学の准教授から教授に昇進し、また七田(H16)が東京都医学総合研究所脳卒中ルネサンスプロジェクトのプロジェクトリーダーから東京医科歯科大学難治疾患研究所神経炎症修復分野に教授として異動となった。また福岡歯科大学総合医学講座内科学分野助教の司城(H20)は九州中央病院脳神経内科に異動し、新たに植木(H24)が福岡歯科大学総合医学講座内科学分野助教として採用された。そして福田(H4)が聖マリア病院脳神経センター長から同院副院長に、また同年 11 月に九大病院救命救急センター臨床助教の賣豆紀(H21)が助教に昇進した。1 名の新入研者があり、矢崎(R3)は聖マリア病院で内科専攻医研修とともに脳血管障害に関する専門研修を開始した。そしてこれまで研究室に多大な貢献をしていただいた矢坂(S57)が定年により九州医療センターを辞して福岡脳神経外科病院副院長に就任し、また水戸(H29)が研究室人事から離れ新たな道を進むこととなった。

脳梗塞超急性期の標準治療として rt-PA 静注また脳血管内カテーテルによる血栓除去療法が確立し、2023 年度も当研究室の多くの関連施設が一次脳卒中センター(primary stroke center: PSC)また血栓回収脳卒中センターに準じた PSC コア施設に脳卒中学会から認定された。地域の脳卒中超急性期～急性期の医療体制の充実のためにも、脳卒中や神経救急疾患の診療を目指す若手医師の養成を、さらに脳神経血管内治療専門医(2023 年度:研究室内に 10 名在籍、研究室 OB 3 名)の養成をも継続していきたい。また患者・家族に対する情報提供のために「脳卒中相談窓口」が主に PSC コア施設に設置されるようになってきているが、相談窓口の業務については試行錯誤の状態の施設が多いのが実情である。今後は急性期また回復期関連施設において多職種の密接な連携による実態を伴った脳卒中相談窓口を普及させていきたい。さらに脳卒中急性期加療や再発予防のみならず、回復期リハビリテーションや神経・老年疾患など周辺領域の診療へも幅を広げて、認知症・てんかん・パーキンソン病などを始めとする神経疾患に対する診療体制をも引き続き整えていきたい(2023 年度:リハビリテーション科専門医 6 名、神経内科専門医 36 名、老年科専門医 27 名、認知症専門医 10 名)。特に 2023 年末に上市されたアルツハイマー病の新規治療薬の副作用として脳浮腫・滲出液貯留や脳微小出血・脳出血があるため同薬の使用には注意深い経過観察が必要であるが、当研究室の医師は日常的にこれらに対応しているため、認知症の新規治療において果たす役割は非常に大きいと考えている。そして臨床業務が多忙な中、関連施設に出向中の若手メンバー(芝原[H23]、北村[H24]、橋本[H26]、吉野[H26]、木附[H27]、日高[H27])は英文で症例を報告している。

研究面では福岡脳卒中データベース(Fukuoka Stroke Registry: FSR)を用いた臨床研究と、マウス脳虚血モデルや培養細胞を用いて組織学的・分子生物学手法による基礎研究を継続している。FSR では前向き登録症例の追跡調査を継続するとともに、今後は既存の FSR データと画像情報など他の臨床情報との融合や、DPC 情報やサマリー情報をもとに脳卒中患者のデータを後ろ向きに収集していきたい。FSR を用いた研究を2023年に5報(入江(芙)[H14]、中村(晋)[H15]、脇坂(佳)[H22]、植木[H24]、大屋[H25])を論文報告したが、大学院生を中心に関連施設等への出向者も FSR データを用いて臨床疫学研究を継続している。2023 年度は FSR データを用いて脇坂(佳)[H22]が急性期虚血性脳卒中における体重と短期機能予後に関する研究(Sci Rep 誌, 2023 年)で、また植木[H24]が eGFR 低下および蛋白尿と虚血性脳卒中後の長期臨床転帰に関する研究(Stroke 誌, 2023 年)で学位を取得し、ともに同門会奨励賞を受賞した。また関連施設での臨床研究をもとに清原[H20]は英文原著を報告した。基礎研究では、脳血管周皮細胞に中心とした neurovascular unit に関する研究や脳梗塞後の内因性組織修復と機能回復のメカニズムに関する研究などを継続している。山中(H24)は活性酸素種産生酵素 NADPH oxidase4 の欠失はミクログリアとマクロファージの貪食能を向上させて脱髄モデルマウスでの再髄鞘化を促進させることを実験的に証明して Glia 誌(学位論文)に報告し、同門会賞特別賞を受賞した。また芝原[H23]は脳梗塞巣内の脳血管周皮細胞が細胞外マトリックスに作用して組織修復を促進させることを英文原著で報告した。今後も臨床研究と基礎研究を推進して、将来的に脳梗塞後遺症を軽減しうる新規治療法の開発に結びつけていきたいと考えている。

(文責:脇坂義信)